



TITLE:

<論文>ロールシャッハ法における
「父親・母親イメージカード選択」
に関する一考察 --限界吟味段階
に着目して--

AUTHOR(S):

石井, 佳葉

CITATION:

石井, 佳葉. <論文>ロールシャッハ法における「父親・母親イメージカード選択」に関する一考察 --限界吟味段階に着目して--. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 2019, 22: 44-54

ISSUE DATE:

2019-03-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/237842>

RIGHT:

論 文

ロールシャッハ法における「父親・母親イメージカード選択」に関する一考察
—限界吟味段階に着目して—

京都大学大学院教育学研究科

博士後期課程 3 回生 石 井 佳 葉

Selection of Father and Mother Image Card on the Rorschach Method

ISHII, Kayo

キーワード：ロールシャッハ法、父親・母親イメージカード、限界吟味段階

Key Words : Rorschach Method, Father and Mother Image Card, Testing-the-limits

1. 緒言

臨床現場においては、患者の心的状態の理解のために心理検査が用いられる。特に投映法では、曖昧な刺激を呈示し、それに対する被検者の反応をもとに無意識的な次元でのこころのありようを推測する。本研究で扱うロールシャッハ法は H.Rorschach (1921) による『精神診断学』において発表され、Beck, Klopfer, Rappaport, Schafer などによって発展させられてきた。この検査では、インクの染みでできた刺激図版について、どのように捉え、何を知覚するのか、そしてそれをどれだけ検査者にわかるように説明できるのか、といった観点から、被検者の防衛活動や情緒的な側面をつかむことができると考えられている。また、大きな特徴として、被検者の反応を記号化し、数量的な分析が可能となっている。これにより、Klopfer の R. P. R. S や Holt, R. の一次過程に関するスコアリング、Devos の感情カテゴリーなどサインアプローチの研究が活発に行われてきたと言えるだろう。そのため、先行研究においては、特定の精神症状や精神障害とロールシャッハ・スコアの関連性が検討され、臨床現場におけるアセスメントに還元されてきた。特に、近年ではエビデンスベースの考えに沿って、主に統計的な観点から解釈を進める包括システムの使用が増加しているようであり、R-PAS という新システムも開発されている (丹治・松本, 2014)。

ただし、ロールシャッハ図版を通して示される反応がすべて数量化されるわけではなく、スコアに落とし込めない側面にも着目していく必要があると思われる。そこで、本研究においてはロールシャッハ法のうち、スコアリングの対象とならない「父親・母親イメージカード選択」を取り上げて論じたい。後述するが、これは限界吟味段階と呼ばれる段階で実施されるものであり、標準的な施行方法の中には含まれていないが、片口法の創成者である片口安史、Klopfer 法を本邦に紹介した河合隼雄らもこの手続きに着目した研究を行っている。また、石井 (印刷中) の臨床心理士を対象とした質問紙調査におい

でも広く用いられていることが示された。そこで、本研究においては、父親・母親イメージカード選択に関して、ロールシャッハ法のプロセスに沿って特徴を整理し、その意義を考察することを目的とする。

2. ロールシャッハ法における各段階

父親・母親イメージカード選択の手続きについて検討する前に、ロールシャッハ法の各検査段階について整理を行う必要があるだろう。本研究では、片口法での実施を想定し、片口（1987）や馬場（2002）を中心にまとめることとする。

2-1. 自由反応段階 Performance Proper

被検者は10枚のインクの染みでできた図版を呈示され、そこに見えたものを話すように促される。馬場（2002）が論じるように、「何かに見立てる」課題を意味する教示でなければ、多くの人は「インクのしみ」と答えるだろう。しかし、この自由反応段階ではしみを何かに見立てようとするところに、その被検者の見方、考え方、連想の仕方などが関与すると言える。むしろ、馬場（2002）は被検者の内面にあるものを通して外界を捉えなければ、インクのしみを何ものかに見立てることはできないとしている。Beckが自由連想段階（free association period）と名付けているように、刺激図版から連想を展開させていく自由反応段階は、一見すると精神分析における自由連想法と類似しているように思われる。検査者は被検者から自発的に出てくる反応を中立性を保って聞き、被検者はあいまいな刺激を前に語るうちに退行が促進される。しかし、自由反応段階ではテスト図版という現実的な刺激がある点において、自由連想法と決定的に異なる（小此木・馬場, 2012）。そのため、連想法の範疇に入れることは誤りであり（Schachtel, 1966）、被検者の置かれた状況が自由であるとは言えないと考えられる（小此木・馬場, 2012）。一方で、この自由の制限は被検者を守る役割も有していると考えられ、馬場（2002）は図版によって連想が広がりすぎることを防ぎ、現実とのつながりが保たれることを指摘している。質問段階では、より現実的な制約が強くなるが、各段階における反応を比較検討していくことが被検者の自我機能を理解する上で重要であると考えられる。

2-2. 質問段階 Inquiry

質問段階では先の自由反応段階において語られた内容に関して、図版のどの要素を用いて、どのように見ていたのか論理的に説明することが求められる。検査者の側は、被検者の反応を明確化することが必要であるが、影響を与えないようにしなければならないとされている（Klopfer, B. & Davidson, H., 1962）。このように、被検者の自発的な反応が待たれる状況から一転して、質問段階では検査者からの一定の質問に答えなければならない（片口, 1987）。言い換えるならば、自由反応段階においては、より感覚的、非論理的に図版を捉えることを許されていた被検者は、「自分のなした表現をどのくらい現実状況と照合しなおし、論理付けできるかという現実検討力が問われる（馬場, 2002）」ことになる。論理的な説明の中で、自我の現実機能を高め、不適切な認識を修正することもできるが、ますます主観的な連想を発展させる場合もあるだろう（馬場, 2002）。そのため、質問段階における被検者の反応から、現実を客観的に捉えることができるかどうか、また、空想世界への没入の度合いを理解できると考えられている。

2-3. 限界吟味段階¹ Testing the limits

自由反応段階と質問段階は省略することの許されない最小限に必要な手続きであるのに対し、この段階は時間的な余裕が乏しいとき、検査者が未熟であるとき、再検査の必要なときには省略されることがある（片口，1987）。『新・心理診断法』を参考に、一般的に実施される限界吟味を表 1 にまとめる。

表 1 片口法における限界吟味段階での手続き例

吟味内容	説明
図版の把握の仕方	全体反応もしくは部分反応のみが示された場合に、それぞれ部分反応／全体反応が可能であるか吟味する。
人間運動反応 M	人間像 H を示しながら、そこに運動感覚を伴わない時に M 反応をどの程度示すことができるかを明らかにする。
形態彩色反応 FC	FC が一つも見られない場合に、生じやすい部分を指摘して、この決定因を用い得る能力を検討する。
陰影効果 Fc、FK	自発的に濃淡反応を示さない被検者に、IV または VI カードを呈示して、その陰影（濃淡）効果に対する感受性を吟味する。
公共（平凡）反応 P	公共反応が 4 つ以下である場合に、P をどの程度みることができるのかを知る。

表 1 以外にも、Hutt&Shor (1946) による概念形成法、Pascal et al (1950) による性反応吟味法、Janis&Janis (1946) による自由連想法などがある。その中でも、好悪法は、被検者に好きなカードと嫌いなカードを選択させ、その理由を尋ねる方法である。様々な手続きが考案されているが、渡辺 (1995) はこの検査段階の目的について、被検者がある特徴を知覚できるかどうかを確かめるものと、解釈を深めるものの 2 つに分類している。本研究において扱う父親・母親イメージカード選択は後者に該当するものと思われる。

Klpfer, B. & Davidson, H. (1962/1964) は限界吟味段階について、検査者の態度が極端に変化することを指摘している。すなわち、刺激図版をめぐる被検者の反応に対して、自由反応段階および質問段階ではまったく干渉しない態度が徹底されていたにもかかわらず、限界吟味段階においては指示的な介入がなされたり、探りが入れられたりするのである。片口 (1987) や河合 (1964) も、特に被検者の反応が貧困である場合にこの段階を実施することが有用であると述べている。裏を返せば、この段階における検査者側の積極的な介入によって、被検者の反応を半ば強制的に引き出そうとする姿勢がうかがえる。こうした検査者側の態度の変化は、被検者の反応やテスト体験に大きな影響を及ぼすと推察されるが、その詳細について Klpfer, B. & Davidson, H. (1962/1964) では記述されていないようである。

一方、批判的な意見もあり、Rapaport (1946) は、検査の統一性、内的恒常性、客観性を妨げるために限界吟味の実施は適当ではないと論じており、Exner に始まる包括システムにおいても限界吟味段階は原則実施されないことになっている（藤岡, 2004）。これは検査としての信頼性・妥当性の問題から批判されているのであり、態度が変わる検査者をどのように被検者が体験し、反応しているのかについ

¹ 包括システムや RPAS に限らず、再テスト法を用いる場合には実施されないことがある。

ては未だ十分に考察されていないものと思われる。したがって、限界吟味段階については、その検査者—被検者関係という観点から再度その実施方法や内容を検討する必要があるだろう。これについては後ほど扱うこととする。

2-4. 類推段階 Analogy

Klopfer et al. (1954) において加えられている検査段階であり、質問段階と限界吟味段階の中間程度の介入が行われるとされている。具体的には、一つの反応に明らかに用いられた決定因について、他にも適用できるかどうか尋ねることにより、被検者の反応間に存在する間隙を埋めようとするアプローチである。この段階での情報をもとに質問段階で不十分であった部分を類推し、スコアでは付加分類として取り扱われる。ただし、Klopfer 自身も、ロールシャッハ法の記録が歪んでしまうことを懸念し、この段階における質問は多すぎるよりは少なすぎる方がよいと注意を促している。

ここまでロールシャッハ法における各検査段階について整理を行った。次項では、各段階の違いを踏まえつつ、父親・母親イメージカード選択の特徴について考察していく。

3. 父親・母親イメージカード選択に関する先行研究

これまで述べてきた通り、イメージカード選択は通常、限界吟味段階の手続きとして実施される。10枚のロールシャッハ図版の中から、検査者が指定したイメージに合うものを選択してもらい、その理由について聴取することが多い。好きまたは嫌いなカードを選択してもらい好悪法に加えて、阪大法では検査者が必要と判断した場合に、参考として父親、母親、自分（自己）のイメージカードの選択がなされる（辻・福永, 1999）。名大法ではイメージカード選択が通常の手続きとなっており、さらに「重要と考えられる人物」に関するカードの選択も求めることがある（名古屋ロールシャッハ研究会, 2018）。前項において言及したように、限界吟味段階は自由反応段階や質問段階とは異なり、特に実施が義務付けられておらず、その教示内容や解釈の手続きについて明示されていない。そのため、検査者の判断に依る部分が大きいと言える。

イメージカード選択に関する先行研究を概観すると、父親イメージとしてIVカード、母親イメージとしてVIIカードが選ばれることが期待されている場合が少なくない。これは Bochner&Halpern (1945) が各カードに関する解釈仮説を提唱したことにまつわると考えられ、それ以降この仮説を検証することを目的とした研究が行われてきた（Meer&Singer, 1950 ; Rosen, 1951 ; 村上, 1957 など）。最近でも、福井ら（2008;2011）、三浦・柴原（2015）が調査方法を工夫しながら検証を試みているし、坪井ら（2012）も小・中学生を対象を限定して仮説の妥当性を検討している。これらの研究に共通しているのは、父親・母親カードがそれぞれ解釈仮説通りに選択されやすいのか、またどのカードがより選択されやすいのかに関心が寄せられている点である。Zein et al (1963) はこの解釈仮説を検討するアプローチを整理し、各イメージを象徴的にあらわしているカードを直接選択させる方法、Semantic Differential 法 (SD 法) を用いて各図版の刺激価や象徴的な意味づけを回答させる方法、IVカード・VIIカードに与えられた反応をもとに両親に関する情報が得られるかどうか検証する方法の3つに分けた。田中（1984）はこの分類に沿って国内外の研究を参照し、父親イメージ=IVに比べて、母親イメージ=VIIの方が仮説が支持されにくいことを見出している。このように、父親・母親イメージカード選択は Bochner らの解釈仮説を検

証するための一手法として扱われてきたことが推察され、基礎的研究の中で用いられてきたようである。

一方で、喜納（1996）は、こうした実験的側面よりも被検者の実際の親子関係や自己評価等がどのような形で反映されるのかに着目し、SD 法とインタビューをあわせて実施している。臨床事例研究においても、山中（1975）は精神科病院に入院している患者の精神療法の前後に実施したイメージカード選択の結果からその変化を考察している。星野（1993）も不安を主訴に来談した中年期女性の心理療法過程とロールシャッハ法の結果を示し、考察の中でイメージカード選択についても触れている。井原（1983）は、母子に実施し、互いにどのカードを父親、母親イメージカードとして選択するのか予測させるなど、独自の手法を取り入れている。高橋（2012）は、家族ロールシャッハ法とイメージカード選択を踏まえた家族力動のアセスメントに取り組んでいる。そこでは、IVカード＝父親、VIIカード＝母親にも触れつつ、実際に選択されたカードの反応に付与された感情や思考・言語の特徴から理解を試みている。西尾（2016）は高齢者女性のジェンダーイメージを理解するために、男性・女性のイメージカード選択を実施し、父親・母親イメージカードと比較検討を含めて考察を行っている。

このように、個別の事例理解に際しては、どのようなカードがどのように選択され、どのような理由が語られたのかといった点に注目されてきたことが分かる。そのため、父親・母親イメージカード選択は、Bochner らの解釈仮説の妥当性検討に用いられるだけではなく、アセスメントのツールとして用いられてきたと言えるだろう。もちろん、事例研究においても解釈仮説を踏まえた解釈がうかがわれ、それを軸に解釈されることもある。例えば、父親イメージカードとしてIVカードが選択され、選択理由においても「強くてたくましいから」と述べられた場合を考えてみる。ここまでであれば、男らしい父親イメージが推察され、Bochner らの解釈仮説と一致している。ただし、「強くてたくましい」はずのIVカードの自由反応段階において、弱々しいイメージと結びつく反応内容が示されていた場合、さらに検討してみる必要がある。すなわち、同じIVカードを前にしても、自由反応段階及び質問段階と、限界吟味段階における被検者の体験は大きく異なることが推察される。Schachtel（1966）は、ロールシャッハ・テストの解釈を行うにあたってテスト状況、すなわち、検査者の態度やテスト環境とそれに対する被検者の体験のありようについて考慮する必要があることを述べている。限界吟味段階では、父親・母親イメージカード選択のテスト状況、被検者の体験についてどのように考えることができるだろうか。被検者は、検査者から教示を受け、10 枚のカードの中から各イメージを選択させられるという現実的状況がある。この手続きをめぐる被検者の内的な体験について、自由反応段階・質問段階における各カードの反応産出、父親・母親イメージの選択、選択理由の説明といった過程に着目して考えることとする。本稿では、こうした一連のプロセスを検討するにあたり、文章の流れに関する記号学の概念を援用してみたい。

4. 父親・母親イメージの選択をめぐる被検者の体験

4-1. パラディグマ軸とシンタグマ軸からみる父親・母親イメージカード選択の体験

ここでは、記号学における「パラディグマ」「シンタグマ」の概念を用いて父親・母親イメージカード選択について考えてみたい。パラディグマな選択とは、文の中である名詞を形容する同義形容詞の中から一つを選ぶような順序不定の連想関係、シンタグマな選択とは、文における言語の線状の関係をそれ

ぞれ意味している。川岸（2007）は、箱庭療法や夢における力動を論じる中で、この2つの概念について文章（「僕は学校に行った」）を例にわかりやすく説明している。彼によると、パラディグマな選択は、「僕は」の代わりに「姉は」や「魚屋さんが」など同群の交換可能な語句群のなかから一つを選択することであり、シンタグマな選択は「僕は」という主語の後には「行った」という動詞を置くなど、全体の構成を読みながら一つ一つの語句を並べて文章を形作っていくことであると言う。中井（1992）は、この概念を用いてロールシャッハ法と風景構成法を対比させている。風景構成法では、川、山、田、道、家、木、人、花、動物、石の順で次々と配置が規定され、その中で全体を風景として構成しなければならない。一つのアイテムは、全体コンテキストのなかで、他のアイテムと相互に関連付けられ、呼応構成されてゆく必要がある（武藤, 2002）。主語には述語が続くように、川の位置によって山が、川と山によって田や道が規定されていく過程はシンタグマ的であると考えられる。それに対し、ロールシャッハ法では、刺激図版を受け、そこから何かを知覚し選択してゆく過程が中心となっている。プロットの刺激から羽のある生き物を捉えたとして、それを「コウモリ」、「チョウ」、「羽の生えた人間」などの概念の中からどれを選択するのか、どのように表現するのかについてはパラディグマ的であると言える。

それでは、本研究で扱う父親・母親イメージカード選択はどのように考えられるだろうか。ロールシャッハ法の自由反応段階・質問段階においては、プロットの輪郭、色彩、濃淡などの現実的な縛りが存在するものの、被検者はプロットに知覚したものをそのまま採用することが許されている。一方で、父親・母親イメージカード選択においては、すでに何かを見出した刺激図版の中から〈父親〉〈母親〉のイメージに合うものを選ぶことが求められる。好悪法では〈好き〉〈嫌い〉という個人の感覚レベルの選択であるが、〈父親〉〈母親〉に関しては被検者の経験に基づく個別的な意味だけではなく、父親—男らしい、厳格さ、母親—温かい、包み込む、優しいなど、社会一般的な意味も想起させるものと考えられる。このように、父親・母親イメージカード選択においては、自由反応段階・質問段階において既に知覚した概念、指定されたイメージにまつわる意味や連想の制限を受けて選択の範囲が規定されながらも、〈父親〉〈母親〉イメージという全体を構成しなければならない。こうした特徴は、風景構成法において、アイテムを順に描いていくことで次に描かれるアイテムの配置や全体の構成が規定されていく点と重なる部分もあるだろう。そのため、ロールシャッハ法のなかでも、父親・母親イメージカード選択に関してはパラディグマ的というよりもシンタグマ的と言えるかもしれない。

以上を踏まえ、父親・母親イメージカード選択の全体構成を整理してみると図1のように示すことができる。まず、自由反応段階・質問段階において産出された反応（ α ）があり、限界吟味段階の指示によって父親・母親イメージが指定される。10枚のカードの範囲内で選択を行い、それに基づいて理由を説明する、という各作業がこの順で実施されることで、父親・母親イメージカード選択の手続きが成立すると考えられる。選択する前からその理由を述べることはできないし、イメージの指定がなければ選択がなされることもないだろう。これまで述べてきた通り、刺激図版のプロットを何かに見立てる過程、「 α 」の選択はパラディグマ的であると言えるだろう。なお、質問段階において自由反応段階で示した反応に基づき説明を行う過程そのものは、先の反応によってその後が規定されるという順序性を帯びており、パラディグマというよりもシンタグマに近いものと言えるが、本論の目的から外れるため、ここではこれ以上論じない。

そして、父親・母親イメージカードの解釈においては、このシンタグマ的な性質が利用されているように思われる。選択理由をめぐる語りから、指定されたイメージに対する情緒的側面や捉え方について推測し、さらに、選択されたカード特有の刺激や付与された反応に着目することで、先の理解を裏付けていく流れがある。例えば、父親イメージカードの選択理由において「見ていて嫌な気持ちがするから」と語られたとすると、そこから「父親や男性に対する嫌悪感や不快感」がうかがえるだろう。そして、選択されたカードが「巨大でゴツゴツした大男」という反応内容の陰影カード（IV）であったとするならば、この選択をせしめた父親イメージについて、大きくて威圧的な存在に対するネガティブな感情や濃淡刺激が温かみと結びつかず、男性に甘えられない感覚を抱いている可能性についても考察することができるだろう。しかし、実際にこの手続きを実施すると、嫌悪感がうかがえる選択理由であるのに、それを導いたのは「あたたかそうな毛皮のマント」の反応内容が付与されたカードである場合がある。また、父親に対する親和的な理由が語られているものの、父親イメージカードが「血を流して喧嘩している」反応であるなど、一連の過程に歪みが生じる事例も少なくない。こうした反応は、まとまりある父親イメージとしての全体構成を揺らすシンタグマ的な歪みとして捉えることができる。川寄（2007）は、先の「僕は学校に行った」を例に歪みについて論じている。この一文に「犬に」という目的語を統合させると、「僕は学校に犬に行った」というなんとも居心地の悪い全体構成となる。「犬に」は歪みの要因であると同時に、これによって「僕は学校に犬に導かれて行った」や「僕は学校に犬を見に行った」などと文の可能性を押し広げる力を持つと考えられる。

父親・母親イメージカード選択に話を戻すと、各イメージの全体構成の歪み、すなわち、自由反応段階で付与された反応—被検者の内的な父親・母親イメージカードの選択—選択理由の説明といった一続きの過程において生じる歪みに着目することで、より解釈の幅が広がるものと考えられる。被検者は父親・母親イメージカードを選択するように教示を受け、それらのイメージについて意識的無意識的に連想を働かせるだろう。そして、選択するという能動的に見える行為についても、選ぼうという意識と、

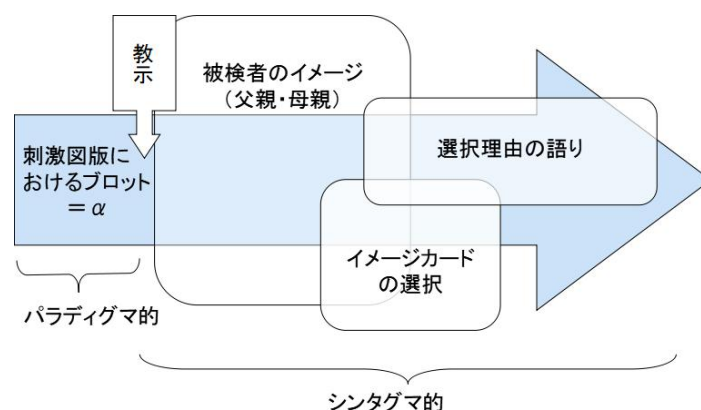


図1 父親・母親イメージカード選択における全体構成

どうしてもそれを選んでしまうという無意識的な側面が関与していると考えられる。父親・母親イメージの連想、実際の選択、選択理由の説明の各場面において、Freud のいう夢の検閲機能(1900/2007;2011)のように本来の状態とは異なる形で我々の眼前にあらわれるかもしれない。そこでは、「僕は学校に犬に行った」のように、イメージカード選択の各場面の繋がりが不自然な状態となるかもしれないが、「導かれて」や「見に」など何かを補うことで全体の理解が広がる可能性を含んでいると言える。イメージカード選択の過程に歪みをもたらす何かについては様々な議論が必要であるが、本論では検査者の前で選択し、理由を述べるというテスト状況を重視し、検査者—被検者関係に焦点を当てて論じることとする。

4-2. 検査者—被検者関係

心理検査、特に投映法においては、検査者—被検者の関係性が考慮されることは基本となっている。小此木・馬場(2012)は、他者から自己の内面を観察されたり、評定されたりする状況に対する抵抗と、自分をよりよく見せようとする自己愛的な願望の葛藤について論じている。小此木らによると、被検者が受検を快く受け入れている場合においても、退行傾向が進むにつれて抵抗も強まり、受検をめぐる様々な心的葛藤が生じるという。自分の内面が見抜かれているのではないか、課題に失敗して低い評価を受けているのではないか、検査者が自分に冷たく接しているのではないかなど、疑惑や被害感、また投影された敵意や競争心が高まると考えられる。一方で、退行状態に付随する楽しみや満足の体験も存在し、より自分を顕示したい、相手から承認されたいという自己愛的な願望が深められるという(小此木・馬場, 2012)。Schachtel(1966)は、このように被検者がテスト状況をどのように受け取っているかに着目しており、自由反応段階、質問段階、限界吟味段階によってもその受け取り方は異なることを指摘している。限界吟味段階では、検査者が得たい情報について探りを入れることに強調点が置かれているため、それまでの標準化された状況から個別的な場面に変化すると言える(Klpfer, B. & Davidson, H. (1962/1964)。例えば、好悪法においては、その選択と理由の説明が求められることで、被検者はそれまでのテスト課題よりも、個人的な体験を示すことが許されるように感じると推測される(Schachtel, 1966)。父親・母親イメージカード選択に関して言えば、その限定的な教示から、検査者が被検者の父親、母親に関する感情や捉え方について知りたいと考えていることが明らかであるだろう。被検者は、このような検査者の意図を感じつつも教示を受けると自分の父親、母親に関する情緒や連想が意識的無意識的に賦活されると思われる。この個人的な体験をどこまで検査者に見せるのかについては、被検者の「依存—独立の葛藤」(小此木・馬場, 2012)を切り口として考えることができるように思われる。

教示を受けてイメージカードの選択を行う際、「独立」に傾く場合には個人的な内容は抑制され、より社会的な対応をしようと意識されるかもしれない。一方で、「依存」に傾く場合には、感覚や直感を優先し、自由な態度で選択されるかもしれない。これに続く選択理由の説明では、シンタグマ軸に沿うならば、社会的に望ましいとされる選択の後に個人的な内容が語られることは考えにくいし、感覚的な選択の後には個人的な内容が続くものと推測される。しかし、歪みは生じ得るものである。個人的体験を抑制して選択した後で、やはり検査者にわかってもらいたい、知ってほしいといった依存的な感情が惹起して、「実はこっちのカードを選ぼうと思ったんですけど…」などと語られることがある。反対に、依存感情に後押しされて直感的に選択した後で、検査者にどのように受け取られているのかが不安になり、

理由の説明では「なんとなく」などと説明を回避したり、表面的な内容に留めようとしたりするかもしれない。このように、父親・母親イメージカードの選択に関して、教示→イメージの連想→カードの選択→理由の説明という全体構成において生じる歪みに着目すると、被検者の依存をめぐる葛藤のありようについて解釈することができるかもしれない。

それでは、この歪みが一切生じない場合についてはどのように考えられるだろうか。イメージカードの選択時から自由な態度であり、選択理由の説明においても加工されていない生々しい語りが見られる場合があるとする。選択から理由の説明に至るまで、現実的、社会的な対象である検査者にどのように伝わってしまうのか、受け止めてもらえるのかという不安はうかがわれず、むしろ眼前の検査者が存在しないかのようなのである。被検者の中に葛藤が存在していない、または一切抱えられないまま検査者に投げ込まれていることが推察され、人格障害水準や精神病水準に陥る可能性のある人だということが考えられるかもしれない。一方で、カード選択や理由の語りにおいて、社会的に望ましいような態度に終始し、検査者に個人的な内容を見せようとしなない場合には、検査者という存在が強く意識されているように思われる。依存欲求の高まりを必死に抑えているかもしれないし、対人恐怖をめぐる不安によって防衛が強くはたらいっているのかもしれない。

ただし、ロールシャッハ法における検査者と被検者の間には、既に自由反応段階、質問段階を通して依存—独立の葛藤をめぐるやりとりがなされていると考えられる。そのため、限界吟味段階における父親・母親イメージカード選択だけを全体構成として解釈を進めるのは非常に危険である。よりマクロな視点にたつて、限界吟味段階以前に理解される被検者の葛藤のありようと、それに続く父親・母親イメージカード選択における反応の間のシンタグマの歪みにも着目すれば、より多層的に被検者についてアセスメントすることができると言える。

5. まとめと今後の課題

本論では、ロールシャッハ法の父親・母親イメージカード選択を取り上げ、この手続きが限界吟味段階で実施される点に着目して考察を行った。限界吟味段階に関する研究は多くはないが、諸家の指摘から、自由反応段階・質問段階とは異なる検査者のやや介入的な姿勢が、被検者の反応理解の手がかりとなることを見出された。すなわち、限界吟味段階においてはより具体的な教示がなされるため、被検者はどのような情報が求められているのかを察するかもしれない。また、こと父親・母親イメージカード選択においては、被検者の個人的なことに関心が向けられているように感じられ、それまで刺激図版の陰に隠れて中立的に接していた検査者がより意識される状況となる可能性が考えられた。被検者の心の中には試されているような不安や、自分をよく見せたい願望が生じ、こうした心の動きが歪みとなって、教示の理解→各イメージに関する連想→イメージカードの選択→選択理由の説明という全体構成の中にあらわれてくることをシンタグマ、パラディグマの概念を引用しながら論じた。

父親・母親イメージカード選択の臨床的活用を促進していく上で、こうした試論は意義深いと思われる。高橋（2012）は、この手続きを通して被検者の家族成員のイメージを把握するだけでなく、語られた反応、付与された感情から一つの仮説をもち、治療関係の見通しに役立てていると述べている。本論では、この手続きで得られる父親・母親イメージの質的側面まで扱うことができなかったが、こうし

た点は個別事例をもとに検討を行う必要があるだろう。石井 (2018) では、青年期女性 9 事例における父親イメージを取り上げ、選択されたカードにおける反応内容、選択時の様子、選択理由の語りの検討から、父親イメージをめぐる情緒的側面の検討を試みている。このように、父親・母親イメージカード選択を通して得られる被検者のイメージ理解についても、事例を用いて検討を重ねていく必要がある。本論においては、試論を提示するため、本検査—限界吟味段階、シンタグマーパラディグマ、検査者に対する依存—独立の葛藤をめぐる二元論的な考察に偏ってしまったが、実際にはそのように単純な反応が示されるとは限らないだろう。こうした点においても個別事例の検討を欠かすことはできず、理論と実践の中で父親・母親イメージカード選択に関する知見を積み上げていかねばならない。

引用文献

- 馬場禮子 (2002). 改訂ロールシャッハ法と精神分析—継起分析入門. 岩崎学術出版.
- Bochner, R.&Halpern, F (1945) . The clinical application of the Rorschach test. 2nd.
- Freud,S.(1900). Die Traumdeutung. Gesammelte Werke. Main: Fisher. (新宮一成 (訳) (2007 ; 2011). フロイト全集 4 ; 5.岩波書店.)
- 福井義一・三宅由晃・岡崎剛・森津誠・遠山敏・山下景子・岡田信吾 (2011). ロールシャッハ・テストの父親・母親図版解釈仮説の図版選択法による検討.心理学研究, Vol.82,3,pp.249-256.
- 福井義一・三宅由晃・岡崎剛・森津誠・遠山敏・山下景子・岡田信吾・安藤治 (2008). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親図版解釈仮説の妥当性に関する研究—図版評定法を用いて—. 心理臨床学研究, 26 (5). pp.549-558.
- 藤岡淳子 (2004). 包括システムによるロールシャッハ臨床, 誠信書房.
- 星野和実 (1993). 中年期女性の発達とロールシャッハ・テスト:不安を訴えた 2 事例の検討. 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科,40,pp.159-173.
- Hutt,M.L.& Shor,J. (1946) . Rationale for Routine for Rorschach “Testing-the-Limits” . Rorschach Research Exchange, 10(2), pp.70-76.
- 石井佳葉 (2018) . ロールシャッハ法における父親イメージカード選択過程の検討—青年期女性の父親イメージに着目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 64, pp.317-329.
- 石井佳葉 (印刷中). ロールシャッハ法における父親・母親イメージカード選択の実態. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65.
- Janis,M.G.&Janis,I.L. (1946) . A supplementary test based on free associations to Rorschach responses. *Rorschach Research Exchange*, 10(1),pp.1-19.
- 片口安史 (1987). 新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.
- 川崎克哲 (2007). 「箱庭療法の『力動性』について—風景構成法, 夢と比較しつつ—. 岡田康伸・田中康裕・皆藤章 (編集) 箱庭療法の事例と展開 (京大心理臨床シリーズ), pp.412-424.
- 喜納祐子 (1996). ロールシャッハ・テストのイメージ・カードに反映される人物イメージと実際の人物評価との関係—青年の父親・母親・自己イメージ・カード選択に見られる男女差. ロールシャッハ研究,38,pp.113-126.
- Klopfer, B., Ainsworth, M.D. & Klopfer, W.G., & Holt, R.R. (1954) . Development in the Rorschach technique 1 : Technique and theory. New York: World Book. (京都ロールシャッハ研究会 (訳) (1957). ロールシャッハ法の発達 I, 京都ロールシャッハ研究会.)
- Klopfer, B.& Davidson, H.H. (1962). The Rorschach Technique : An introductory manual. New York: Harcourt, Brace & World. (河合隼雄 (訳) (1964). ロールシャッハ・テクニック入門 (ダイヤモンド社).
- 小此木啓吾・馬場禮子 (1989). 精神力動論—ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合. 金子書房.
- Pascal,G.R., Ruesch,H.A., Davine,C.A.,&Suttell,B.J. (1950) . A study of genital symbols on the Rorschach test:presentation of a method and results. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*,45(2),p.286.
- Rapaport, D., Gill, M., & Schafer, R. (1946). Diagnostic psychological testing: The theory, statistical evaluation, and diagnostic application of a battery of tests: Volume II.
- Rorschach, H. (1921) . Psychodiagnostik- Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments (Deutenlassen Zufallsformen) . Neunte revidierte Auflage. Huns Huber. (鈴木睦夫 (訳) (1998). 新・完訳 精神診断学. 金子書房.)
- 丹治光治・松本真理子 (2014). ロールシャッハ・テスト技法の使用実態と臨床感について. 花園大学社会福祉学部紀要, pp.1-8.
- Rosen, E. (1951). Symbolic meanings in the Rorschach cards: A statistical study. *Journal of Clinical Psychology*, 7, pp.239-244.
- Meer, B.& Singer, J. L. (1950). A note on the " father" and " mother" cards in the Rorschach inkblots. *Journal of consulting psychology*, 14 (6), p.482.
- 三浦克奈雄・柴原直樹 (2015). ロールシャッハ・テストの父親・母親図版解釈の再検討.神戸医療福祉大学紀要,16 (1), pp.105-115.
- 村上英治 (1957). ロールシャッハ・テストにおける人間関係に関する研究 (1) — “父親カード” と “母親カード” の分析—. 名古屋

- 大学教養部紀要, **2**, pp.1-10.
- 名古屋大ロールシャッハ研究会 (2018). ロールシャッハ法解説:名古屋大学式技法. 金子書房.
- 中井久夫 (1972). 描画をとおしてみた精神障害者—とくに精神分裂病者における心的空間の構造. 芸術療法, **3**.
- 中井久夫 (1992). 風景構成法, 精神科治療学.
- 西尾ゆう子 (2016). ロールシャッハ法からとらえた老年期女性のジェンダーイメージ. ロールシャッハ法研究, **20**, pp.32-41.
- Schachtel, E.G. (1966). *Experimental Foundations of Rorschachs Test. New York: Basic Books.* (空井健三・上芝功博訳 (1975).
ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房.)
- 高橋靖恵 (2012). コンセンサスロールシャッハ法. 金子書房.
- 田中富士夫 (1984). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親カード仮説の諸問題. 金沢大学文学部論集, 行動科学科篇, **4**, pp.1-11.
- 坪井裕子・松本真理子・鈴木伸子・畠垣智恵・白井博美・森田美弥子 (2012). 子どものロールシャッハ法における父親・母親イメージ
図版の検討. 人間と環境, **3**, pp.1-9.
- 辻悟・福永知子 (1999). ロールシャッハ・スコアリング—阪大法マニュアル. 金子書房.
- 渡辺雄三 (1995). 『第 2 章 ロールシャッハ法—実施法』. 池田豊應 (編). 臨床投映入門, ナカニシヤ出版.
- 山中美智子 (1975). ある精神科入院患者のセルフ・イメージと母親イメージとの関係—ロールシャッハ・テストのイメージ反応の変化
を中心に—, ロールシャッハ研究, XVII, pp.197-217.
- Zein, M. & Sechrest, L. (1963). The validity of the “mother” and “father” cards of the Rorschach. *Journal of Projective
Technique*, **27**, pp.114-121.